

学生奮闘記

なぜ島に関心をもつのか～島を活性化する意義～

古澤典子（鹿児島大学農学研究科）

離島について考えるようになったのは、大学院で島嶼学を受講し始めたごく最近です。私の出身の福岡県にも島はありますが、多くは1日1便以上船が出ており距離も近いため、離島の認識はあまりありません。また、離島として思い浮かぶ屋久島や石垣島は観光地であり、その生活や文化を深く考えたことはありませんでした。島嶼学の講義で三島村の薩摩硫黄島、十島村の中之島、ミクロネシア連邦を訪れ、島の生活者の視点を知ったことで様々な気付きがありました。

硫黄島は、硫黄岳で発生するガスの影響で農業が困難な島で、島の生活は自給自足に近いと思い込んでいた私は戸惑いました。しかし、温泉成分で独特の色に染まる港や、波をかぶるくらい海の近くに温泉がある、自然豊かな島で、小さな島でも観光業ができる可能性を感じました。中之島は、牧場でトカラ馬が放牧され、穏やかな時間が流れる島でした。しかし、島唯一の診療所の看護師の方から話を聞き、医者がおらず設備も乏しい島の医療の厳しさを知りました。どちらも短い滞在でしたが、島の人と触れ合うことができ、とても勉強になりました。昨年の夏にはミクロネシア連邦へ行き、チューク州の中心ウェノ島とそこから小型ボートで1時間ほど離れたピス島にそれぞれ2泊滞在しました。私は初めての海外で、日本と異なる環境すべてが刺激的でした。特に印象に残ったのはピス島での体験で、ここで初めて「ビンロウ」を知りました。ビンロウは島の大人が頻繁に噛む、嗜好品の中でもとても身近なもので、楽しさはあまりわかりませんでしたが、相手を理解するために文化を共有することはとても大切だと感じました。

私が訪れたこれらの島、特に面積の小さな離島は、人口減少とそれに伴う少子高齢化や高等教育が受けられない、医療が受けにくいなど共通した問題が多くありました。しかし、授業後の先生の一言で重要なことに気付かされました。これらの問題は、日本の過疎地域でも共通する問題だということです。離島でなくても、交通の便が悪い地域や買い物がしにくい地域、少子高齢化が進む地域は至る所にあります。離島特有の問題はほとんどなく、日本の地方でも同じ問題があると気付けたことは、大きな収穫でした。

最後に、いくつかの島を訪れて感じたのは、離島は「モノの豊かさ」はないけれど「心の豊かさ」がある場所だということです。それが私なりのタイトルの答えです。多くの人に各離島のおもしろさを知って欲しいし、私ももっと多くの離島を知りたいです。そして、島嶼学の講義を通して学んだことを4月からの社会人生活で活かしたいと思います。



海のすぐそばの温泉（硫黄島）



ピス島近くの無人島にて記念撮影